

大正三年九月

校友會雜誌

第貳卷第貳拾號

滋賀縣立彦根中學校校友會

校友會雜誌第貳卷第貳號目次

◎口 稿

- 海外通信 北條 井上園了氏
- 本報編輯部職員名目 出本陸軍少佐殿
- 交際會實施要綱 早稻田大學十三石白水氏

◎論 說

- 友誼を論じて軍國民の覺醒を促す 第五學年甲組 辻 幸雄
- 青年活動の新領土 第五學年甲組 岩崎文彦
- 成業の要素 第三學年甲組 大馬房武彦
- 學生の務 第三學年乙組 寺田吉太郎
- あるものに生じよ 第三學年乙組 布本誠道
- 日産の草木 第三學年乙組 青谷良三

◎文 苑

- 長濱行の道草 特別會員 村田林次郎
- 桃山御殿参拜途中 特別會員 大和田巖山
- 青葉の露より 第五學年甲組 大藤房彦司
- 夏の旅 第五學年甲組 中道福太郎
- 休暇中の一日 特別會員 藤田 隆

◎短 篇

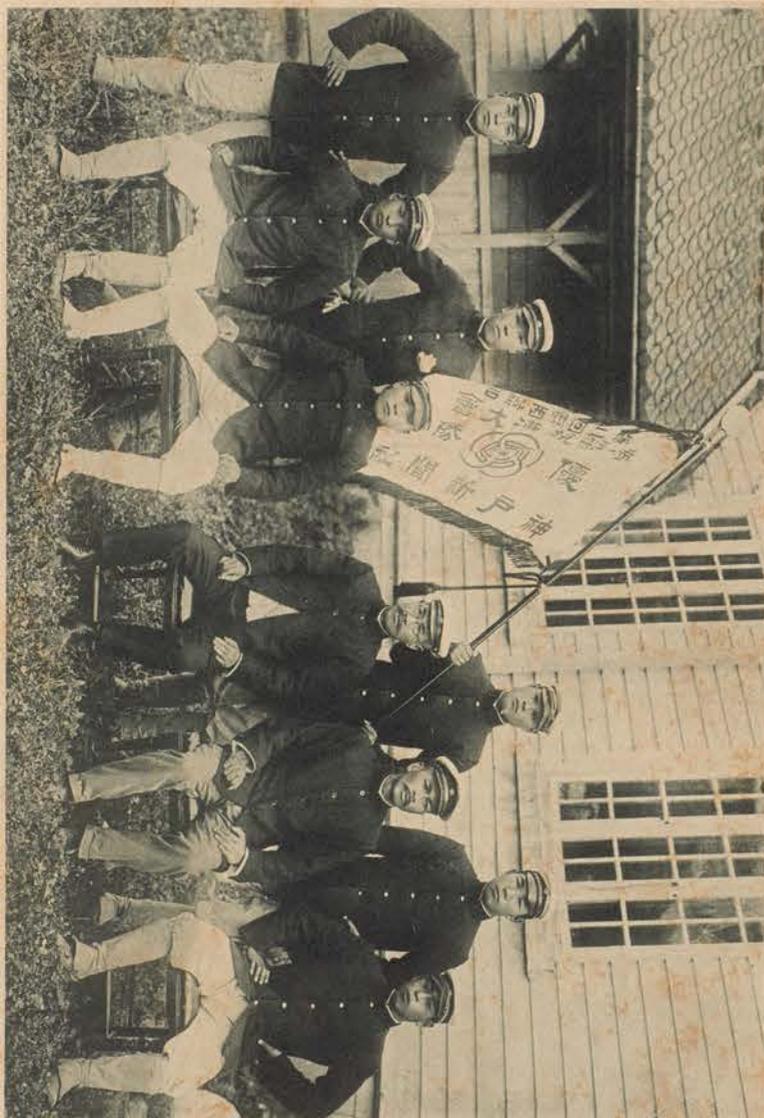
- 琵琶湖一團團草子 村上
- 鎌倉三代権右 生原二萬五千
- 十六夜の月
- 吾が中學校の門前
- 長瀬遊覧の記
- 夕立の夜
- 真流遊覧の記
- 我中學校の門前
- 夏の風景
- 夏の遊覧

◎部 報

- 學務部報
- 庶務部報
- 庶務部報
- 庶務部報
- 水上部報

- 特別會員 森 莊三郎

神戶新聞社主催 第貳回關西聯合端艇大會優勝者



- 吉村野濱 三武村北 郎三瀬水清 郎太平四村 三恭部服 長校川早小 勸万間陌 郎四長田上

校友會雜誌

第二卷 第二十號

講 演

文學博士井上圓了氏講演

只今校長より御紹介になつた井上とは自分の事であります自分は十年ばかり學校教育に従事して居りましたが餘り好成绩の擧がらないのは國民教育の缺乏に據ると思つて明治三十九年から學校教育を他人に譲つて國民教育普及の爲め日本全國を漫遊して居ります校長とは二十餘年前哲學館（東洋大學）設立のため全國勸誘の際鳥取縣で御目に懸つたのが初めて、今度亦御目に懸るを得たのは喜ばしい事である。私は今日は世界の實況に就いて御話し致さうと思ひます兎角日本人は海外の事情に暗い従つて學生も矢張さうである。

彦根といへば昔は最も評判の悪い中學校で二年か三年目には必ずストライキが起つたものであります此頃校風が非常によくなつたのは校長の御訓導によるのであらう。

私はイギリスに居つた時中學校の模様を見るために或る中學校へ入り校長に頼んで寄宿舎へ入れて貰ひました其時丁度労働者のストライキが起つたのですが校長が「まさか日本にストライキはあるまいな」と言はれましたから私が「日本は労働者にはありませんが中學校に屢々起る」といつたすると校長はストライキといへば労働者のやうな無教育なものばかりと考へて居たが珍らしいものがあるなど云つて驚かれました中學校にかゝるストライキの起るのは學生が中學校を以て終生の目的の如く考へて居るから將來の日本人は海外に向つて發展しなければならぬ今日の世界の趨勢を察し前途の遼遠なるを思はゞ中學校位が何だこれ學生の見界の狭きに據るものである。

は何卒日本人に海外の事情を知らせたい幸私は三回迄洋行して五萬七千哩を跋涉しました夫れに就いて實驗した状況を話します。

一昨々年の春南半球一週の目的を以て横濱を出發し香港に三日間滞在して廣東に行きました。

廣東人口は百萬其三分の一は水上生活をして居る世界の市街中水上生活を以て有名なのは東洋にては支那の廣東西洋では伊太利のベニス共に世界の奇觀であります廣東の水上生活は一の船に一家族が住んで居つて晝は外海に出で夜は港に碇泊する水上生活をして居る人は一種人種が異つて居る陸上の人と交際する事ができない結婚する事もできぬ又陸上の學校に入學する事もできぬそこで水上の人ばかり集つて船中に學校を設けてあるこれを學校船といふ其他病院船もある人が死ねばそれを葬る寺船もある水上生

活をして居るものは何代経ても水上生活をして居つて子供には船を興へて分家する。

伊太利のベニスは海上にあつて汽車は海中に入り停車場に下りると直ぐ海でゴンドラといふ舟に乗つて旅館へ行くのである銀行を Bank といふのは此國より起つたので河の岸にあつたからだとか申します。それについては和蘭のアムステルダム土地が海面よりも低い爲めに排水工事をやらねばならぬのでありますこれは餘談であるがそれからフリッツピンへ行きましたフリッツピンは三千七百の島からできて居り最大なのをルソン島といひ其首府をマニラといふフリッツピンは以前はスペインの所領であつたが米西戦争の結果北米合衆國がこれを領するやうになつたのであります。

マニラには土人とスペイン人との混血兒が多く其混血兒は間違ふ程日本人に似て居ます風俗にも日本に似たのがあつて女は日本の袴のやうなものを着て居る非常に暑いから日中出ると日射病に罹る故に日が暮れて後散歩に出るマニラには僅か一日より滞在しなかつた。

マニラから濠洲へ行くには島が多く其島が皆青々とした圓錐形をして居て船がそれらの島の間を縫ふて通りセレベス群島の間で赤道を越へて濠洲へ行くのです。

赤道は御承知の通り無風帯で海が極めて静かである昔帆船で通過した時には却々骨が折れたもので赤道を越えれば別世界へ行くやうに思つて居た私は四回赤道を横切りましたが赤道を通過する時には赤道祭をする今赤道を越えるといふ時には鐘を鳴らすと皆起きて甲板へ上つて来てどこに赤道があるとい

つた所で何も赤い線があるわけでもない依然たる青海原であるけれどもどうも寐て居られないのです。そこで赤道祭をする赤道祭といふのは羅馬の海の神様のネプチューンが人間界を視察に来たといふことをするので誰か一人が神の姿をし他の者は黒ン坊になつたり白ン坊になつたり赤ン坊や青ン坊に其他熊や犬になつたりする又男は女の姿をし女は男の姿をしたりするのでそこで行列を造つて船中を練り歩き一人の罪人を探し出し水甕の中へ放り込んで罪滅しをして祭を終へるので非常に盛なものである。赤道を越えると一種異様な感じがする太陽は北に陰は南に三日月は弦が左にできる行く途中に月曜島火曜島水曜島木曜島金曜島土曜島が散在して居るクックが探検した時毎日一つ宛発見して行つたのださうだ日曜島がないのは日曜日に休憩したものでらしい。

木曜島は最小であるが飲料水があるので船は皆此島に寄航する最も重要でこれが濠洲の北端である。そこで彌々濠洲に入る濠洲で最大の都會はシドニーであるさてここでお話したいのは蟻の塔海岸に數百の蟻の巢が列んで居て高いのは二丈もあるので船中からよく見える蟻の大きで二丈の巢を造るとすると人間は一萬五千尺の家を建てねば釣合はぬ一萬五千尺といへば富士山よりもまだ高いそんな高い家が建てられるものではない又珊瑚島は何程あるか判明らぬ中に人家の建つて居るものもあるこれが皆珊瑚蟲といふ小動物の骸骨で成立つて居るのである。

濠洲では其時秋で木の葉が盛に散つて居る公園は菊の花盛りである私は宿をとらうと思つたが宿泊料が非常に高いので下宿屋へ行つた下宿屋へ行くに北向きの部屋に致しませうか南向きの部屋に致しませうかと聞くから何の氣なし日本流に南向きを撰んださて彌々南向きの部屋へ行つて見るとこれはどうした事か一日中少しも日が照らない太陽は一日北側ばかり照らして居る其上冷たい風が吹き込む寒くて堪らない非常な失敗を致しました。

濠洲には未だ前人未踏の地が日本全土の二三倍もある其内部は沙漠で全く水がない故にこれを南北に縦断する事は非常に困難で屢々計畫されるが十數年以前只一回を除いては殆ど成功したものがない又其内部には野蠻人が住んで居る此の野蠻人は世界人類中最も劣等な種族で家もなければ着物もない甚しきは禪もしない奴がある食物は生物を生で何でも食ふ特に蛇、蛞蝓、蜥蜴、毛蟲等は彼等の最も嗜好する所のものである何等野獸と選ぶ所がない内地へ入る者は屢々此の野蠻人のために殺される故に内地は未だ全く開けて居ない。

濠洲の南部にメルボルンといふ都會があるシドニーに亞ぐ都會で此所から南方の島タスマニーに渡つた其時は既に冬で雪が降つてをりました私が日本を出發したのは春四月一日でしたがマニラで夏濠洲で秋を經過し今タスマニヤで冬に逢つた僅か四十五日間に春夏秋冬を過ぎたのであります。

西濠洲は未だ充分の開化を見ない此處より亞弗利加の南端まで約五千哩ある太平洋が世界で最も大きいといふけれ共中部以南には無数の島嶼が散在して居るしかし此南印度洋五千哩の間は只一つアレクサン

ドリア島の外全く島がないとして其アレクサンドリア島は無人島である私は此大洋を經由して南亞弗利加に渡つたのであるが其航行二十日間見ゆる物は只水と空と時に阿呆鳥が飛んで行くばかりこの鳥は支那で信天翁といひ日本では阿呆鳥といふしかしそれは間違だ少しも阿呆ではない今日でも航行の困難な此五千哩を彼等は只兩の翼に依つて易々として飛び越えるのは偉いではないか宜しく豪傑鳥ともいふべきだ碇泊の一週間前に大暴風に遭遇した一萬噸の船乍ら甲板煙突は潮に洗はれ宛然波の間を潜つて行くやうであるしかし無線電信があつて時々刻々大陸と話ができる今日の航海では決して心配はない南亞米利加から日本へ歸る船が途中で石炭の缺乏を發見して非常に驚いた事があつた尙ほ數百哩の沖合でこれが昔ならば一大事だが有難い事に今は無線電信がある早速掛けて見ると北海道の落石に感じ次に銚子に感じ速刻東京から救助船を派遣して助けられたといふ事がある。

扱て彌々南亞米利加のナタールに上陸しましたトランスバールの一部であつて黒ン坊が人力車を曳いて居る彼等はリキシヤリキシヤといふ足に白粉を塗つて白人を眞似て居る物價は高いが車賃が廉い然し時々後へ引繰返へるから危い彼等黒ン坊の中にはリベリアの如く非常に高尚で共和國を建て大統領を選舉し國會を開設するのもあればブッシマンのように三個以上の物が數へられないものもある言語で分類すれば八種になるといふ事だ。

田舎を散歩して或る小學校を參觀しやうと思つて窓の外から教室を覗いて居ると生徒も黒ン坊であるなら先生も黒ン坊自分を珍らしくでも思つたものか課業をやめて外へ出て自分の周圍に集つてを私見物して居る見物に行つたものが見物せらるゝといふやうな滑稽を演じました。

それから喜望峯を周りナポレオンが流されて有名なセントヘレナ島を過ぎて英國に至りノルウエー、スエーデン、デンマーク、獨逸、佛蘭西を見て北極觀光團に加はり北極帯に入りました其間五日間少しも太陽が没しません。

又再び英國に歸り暫くの間方々を見物の後ポルドーやポルトガルスペインに寄航してブラジルへ行きましたブラジルハ北米合衆國よりも少し廣くて歐洲から頻りに移民が來ます首府はリオデジャネイロと云つて歐米の大都會にも劣らぬ位であるが田舎はまだ開けて居りませぬ旅館に泊つても便所がない私は旅館に着いて便所へ行き度くなつたから給仕を捕へて

「オイ給仕便所は何處だ」

「今直ぐですか」

「ウン直ぐだ」

「少しお待ち下さい」

どうするかと思つて居ると厚い紙を持つて來たそれを座敷の角に敷いて何卒此處へといつて出て行きました少々驚きましたが仕方がないから其處へやると給仕がそれを包んで表へ放り投げましたするとポル

チユーンといふ鳥が来てそれを食つてしまつたボルチユーンといふのは衛生係りといふ意味だそうですが是様に二三の都會を除いては殆ど便所がない人は皆電柱の下へ小便をする何かないと小便ができぬ者も見えて犬でも電信柱か何かに一寸引掛けるで其電信柱の附近は臭氣芬々として寄り付けたものでない。それからウルガイを経てアルゼンチンへ行きましたアルゼンチンは大部分坦々たる平野で盛に牧畜が行はれて居ります次に南方の一孤島英領のフォークランドに上陸しました年中雨風で風が強いため木が一本もない町を歩いて居ると町の人が「貴郎は何處の人ですか」と聞くから「日本です」と答へると「日本萬歳」と號ぶ萬歳は世界共通でありますそれから一杯やらうといふので酒屋へ行き頻りに日本萬歳を連呼されました南亞米利加の南端なるマゼラン海峡は非常に景色が明媚でノールウエーの西岸日本の瀬戸内海と共に世界の三大絶景の一つであります。

智利は實に細長い國で南部は年中雨や風ばかり北部は又年中少しも雨が降らない毎日晴天ばかりであります従つて家屋の構造も異り屋根がない只日避があるのみでありますそこで上流の人は時機を見て雨見物の觀光團を起すといふ事でありますそれよりベルシャメキシコを経て日本に歸りました一昨昨年より一昨年に渡つて五萬七千哩を旅行したのであります

今日の海外旅行は極めて容易で假令言語が通じないでも構はない却つて日本内地の旅行よりも容易であります將來日本人は海外に出掛けなくてはならぬ土耳其人は百十餘萬人南米に行商して商業權を獨占しております江州は古來行商を以て有名であるが今後は大ひに奮發して世界に飛び出し世界的行商をして彼の土耳其人と競争して欲しいものです日本の内地は人口の密度一方哩に約千五百人に對し濠洲の如きは僅かに一人半であるとしても日本人は將來外國へ出なくてはならぬよし出ないまでも外國の事情に通ずる必要があるから諸君も自身の書齋に或は世界地圖を掲げ或は地球儀などを置きて大ひに眼界を擴げ世界的人物となる事を期せねばなりません餘り時間がないので詳細には話せませんでしたがつと右のやうな次第であります。

奉天會戰々勝記念日講話

第十九聯隊

山本少佐殿

自分は山本少佐であります。

先日師團長からの御命令で當校へ來て奉天戰の話させよとのことでありましたからこれから致します。然し私は近衛師團附屬で三十七年十月の沙河の戰で負傷して内地に後送せられて三月の奉天戰時分には熱海の療養地に居りまして實際には参加しませんでした。故に話をするにも甚だ遺憾な所が多いのです。又校友會の雜誌を見ますと安原中佐殿土屋少佐殿奥村大佐殿等の方々が皆此の戰の話させられた

やうです、だから重複を避けて少し趣の變つたのをやりまじやう。

又此の講話に行けどの命令が急に來ましたので準備が充分ではありませんそれで原稿と地圖と首引しながら御話を致しますから御聞き悪いところは御斟酌を願ひます。

第一に造家屯附近で第二軍に屬して居た十九聯隊の戦闘、次に長沼挺進隊の話を致します。始め寸時奉天戰の戦況を少し話します。

先づ奉天戰前に於る兩軍の狀況を話しますと沙河戰の後露軍は沙河の右岸に壓しつけられ此處に堅固な防禦を施し又鐵道で多くの兵を本國から輸送してまいりました。日軍も本國から供給を仰ぎ又第三軍は一月の始めに旅順をとり後編成が變つて其第十一師團は後備第一師團と合して鴨綠江軍を造つた。こんな事は三十七年の十月半ばより三十八年二月下旬頃迄に行はれた。次は此の奉天戰の時の季候です随分寒い零下二十度位である然し雪は降りません、が地面氷結して固くなり堀ることも出來ない、河はすっかり氷つて居ました、然しこれはどこでも渡ることが出來て軍隊の運動に便利でした。

兵力のことは今迄の校友會雜誌にのつてあるやうですが露軍は歩兵四萬五千騎兵六十八中隊砲百三十八門だけ日本軍より優勢でありました。日軍の配置は鴨綠江軍が最右翼で次が第一軍中央が第四軍其左が第二軍最左翼が第三軍と云ふ順序でありました。

又日本の方の計畫では最初鴨綠江軍が敵を破り露軍の左側背を侵して敵を此の方へ牽制し次に第三軍が此に少し後れて敵の右翼を包み第二軍は右の包圍運動を掩護し手を連ねて運動し第一軍第四軍は暫く動かす正面の敵をおさへ兩翼の戦況を見時機を見て敵の正面を衝くやうになつて居りました。又總豫備隊——此は全軍の後方に居ました——は必要に應じて使用することゝ定められてありました。何故是様にせられたかと云ふと正面の敵は十月の末から十一月、十二、一、二月迄毎日鐵條網をはり地雷を伏せ要塞を整へ仲々堅固に守備して居つて左右翼は比較的薄弱であつたからです。

又此の運動は二月下旬から始めらるゝことゝなつて居ました氷が溶けると河が非常な障害物となり又此の頃丁度鴨綠江軍と第三軍が其位置にいたからです。

露の總司令官も又同時に攻勢をとるべく決心しましたそして二月二十五日に其運動を開始しその右翼軍をして日軍の第二軍を包圍せしめやうと考へましたが僅かの差で日本は早く手を出しました。次は戦闘の經過について大略御話を致します。

鴨綠江軍は瑤河城方面で勇猛なる攻撃をやつて敵を撃破しかくして敵の歩騎兵を破つてすん／＼進略した。敵の總司令官は瑤河城が一二日で陥つたのを聞いて非常に神経を惱ましてうつかりすると鴨綠江軍が背部に來るかも知れんと心配し其上四國の十一師團が鴨綠江軍と合したのを知り乃木大將の第三軍の全部が合したものと誤認し大多數の豫備兵即歩兵三十大隊（約二師團半）と砲騎兵若干を加へて馬群單の方面へ急に移動を行つた、暫くして渾河の右岸に日の大軍現はれ且つ鴨綠江軍は僅少であるのが分

つたからこれは失敗つたと云ふので先に送つた豫備隊を大部分元へ退却せしめやうとした其道程はほとんど三十里程もあり且つ大部隊のこと故非常に困難を感じ多くの時間を徒消しました。此時間は日軍に利用せられて乃木軍はどん／＼前進して敵をつゝんでしまつたそれで敵の右翼は段々壞れ始めてごちや／＼になつて退却し始めた。敵は戦の始めに於てすでに受身となつてしまつたのです。

日軍は豫定通りどん／＼進撃する露軍は種々の窮策をやつて見たがあまり苦しいので終に全軍の退却を始めてどう／＼袋の中の鼠のやうにされてしまつた。

然し袋の鼠のやうにしてしまつたもの、敵の全部を捕虜とすることは難しいものです大砲も打ち小銃の射撃も仲々に激しくやるから、でも二三萬の捕虜は出来ました日軍にもう二三個師團あれば敵を全滅することも容易でありましたが残念な事には兵力が足りませんでした。

彼我の損害(死傷)

露 九萬二千人 内三萬人行術不明 (つまり捕虜)

日 七萬人 内第三軍一萬八千七百人

勝敗の原因を考へて見ますに

1 前に云つた様に日軍と露軍との間には用兵上に大なる差がありました。

2 日軍は勇猛でどこまでも攻撃しやうとする即ち働き懸けの位置を占めやうとするが露軍は常に受身で

上は將官より下は兵卒に至る迄やゝもすれば利己的の考を出すので共同動作が自由にやれない、此に反して日軍は總て國家主義で軍人精神を基とし此の場合こうせねばならぬこれが日本の爲めだと思ふと命令があらうがあるまいが自分の利益は顧みず一命を投げ出して非常に奮闘する従つて共同動作も自由にやれる。

前に云ふのを忘れましたが我軍が敵を袋鼠にした即ち最良好の位置に立つた時が今日十日であるのです次は奉天の西方造家屯に於る十九聯隊の動作を話します。此の戦は三月七日に第九師團の平佐少將の指揮せられた左翼隊がやつたので第十九聯隊は其左翼隊の一部隊であつたのです。

さて露軍は日軍の進撃を防ぐ爲めに奉天からやつて来て三月六日に造家屯に到着し陣をとつたそれを三月七日の朝から攻撃を開始し夕暮になつて突撃に移り九時十時頃にやつと占領することが出来ました。今時間に照らして申しますと

午前七時五十分宿營地を出發し午前九時二十分には敵の前方約千米の所へ来たそこで第一線のものは皆河の中へ飛びこんで涯に寄り沿ひ斥候等を出して敵狀を視察した次に右翼に第一大隊を増加し二ヶ中隊のみは豫備隊として後方に殘して置きました。此の河の邊りで大變敵の砲撃を受けたが後我砲兵も陣を敷いた。

十一時二十分第一師團が北大鏡に至る迄ちつと待つて居れと命せられた午後零時四十分第一師團が北大

鏡に行つて攻撃を開始した事を知り此の方面も進撃し始めた其邊りは平坦な畑で身を隠すやうな餘地はないそれで小さい墓地を見付けて漸く蟻のやうになつて身を隠した敵は石と土とで出来て居る村落の周囲の壁に銃眼を開けて丸を打つたから身方の弾の當りは悪いが彼等は落着いて居るものだから非常によく當る、然し我等は非常なる元氣で前進した實に勇敢であつた、敵弾は益々激しくなる進むとは漸々困難となり進んでは止り進んでは止まりして居た其中に中隊長がやられる少隊長が死ぬと云ふ風で又兵も多く傷いたり死んだりして散兵線が薄くなる終には彈丸が缺乏したので靜かに伏して彈丸の輸送を待ち丸を得て勇氣百倍又追ひ逐いと前進した。午後四時二十分頃に日本砲が敵の陣に當つて火災を起した。午後五時頃になると約四百米位の所まで接近した其頃又彈丸が少くなつたので補充せなければならなかつた。六時頃には第一線の兵を増加して突進の決心をいたしました丁度其頃敵の火災は益々盛んになつて敵の狀況が非常に明らかになり又我軍は機關銃隊を派して大に敵を打つたかくして三百米位迄の所へ突撃したが敵の猛射のため將校始め下士卒の倒れるものが多い、ぢりぢりと進んで行つては止りして居たが九時頃にどうく村落へ飛び込んださあ切り相突き合ひがあらでもこちらでも始まる終に敵は多數の死傷兵と砲六門とを残して退却しました。午後十時に村の東方に出て兵を召集して隊列を整頓し又敵の改復攻撃に備へんが爲めに村の背面をしつかり堅めました。

此の戦に於ける露軍の勢力を申しますと此の軍は即ちナボリスキ大佐の枝隊で歩兵六大隊砲四門後に若干の援兵を得たのであります。

我十九聯隊に於きましては二千七八百人程もあつたのが半分以上は死んでしまいました兵卒以外に生き残つた主な者を申しますと、先づ聯隊長聯隊副官旗手第一大隊では大隊長と特務曹長一人第二大隊では大隊長代理の大尉其他將校二三名第三大隊では大隊長中隊長二人他の將校二名です。又奉天戦の最後に於きましては十九聯隊の兵は三百四五十名に減少したのであります此の造家屯に於ける勇敢なる下士卒の事を話させう。

歩兵一等卒 第七中隊 志田由松 岐阜縣吉城郡上保村の人

率先して造家屯に突入し敵を追撃して深く敵地に入り終に敵數名に圍まれました然し大に奮闘して敵一名を殺し二名に負傷せしめ他の者共を撃退してしまひましたそして彼自身も重傷を負ふたにも關らず敵一名を引つ捕へて大隊長の所まで連行してまいりました後に負傷の跡が悪くなつて止むを得ず戦線を退きました此の勳功によつて乃木大將閣下より感状を授與せられ平和改復後には 陛下より勳八等功六級を賜りました。

歩兵伍長 第六中隊 田口又七 出生國郡不明

此の日は朝から風があつて砂煙が激しく立つて居たのでした午後五時六時と云ふ時分には此の砂煙の

爲めに銃の遊底が動かなくなつてしまひました此の時彼は自ら背負袋から銃を手入する油の帛を取り出し敵弾の雨下するをも物とせず散兵線三百米もある間を東に西に奔走してこれを分ち與へましたかくて我軍は射撃の自由を得たのであります彼は平和克復後勳七等功六級を賜りました。

こん度は長沼挺進隊の話を書きます。

一たい長沼挺進隊と云ふのは敵の後方で動作をした騎兵で第三軍の包圍運動は之が爲めに非常に容易に行はれたのです露軍は日本の騎兵が食糧や兵士や其他種々の品物の輸送に大切な東清鐵道を侵すと聞きミッセン公將軍の騎兵全部其他多數の歩騎兵等を北方の鐵道保護のために急派致しました然るに日本は長沼中佐に率ひらるる騎兵二中隊僅々二百か三百名に過ぎないのです實に彼等はすつかり我計略に陥つてしまひました。

さて此の騎兵隊の任務と云ふものは露軍の右側背を搜索し出來れば鐵道電信列車等を破壊して其背部を擾亂し露の第一線に在る兵を後方に吸収しやうと云ふのです。さて一月の八日此の騎兵隊は根據地を出發し約一ヶ月の後新開河の鐵橋に至り守備中の敵兵と戦ひつゝ此れを破壊したるして其後は諸方に於て鐵道電信等の破壊をやり七十三日を費し三百八十四里を踏破して歸りました。今新開河鐵橋破壊の事を少し話しませう。

三十八年二月十二日午前二時頃新開河鐵橋を去る約五千米なる袁家と云ふ地で下馬し沼田少尉以下下士卒三十名をして此の地を守らせ宮内大尉は作業班二隊を率ひ爆薬を持つて出發しました又一個中隊は河の右岸を他の一個中隊は左岸に沿ひ此の作業班を援護しつゝ進みました。かくして作業班は敵丸の雨と降る中を平然として爆薬の導火をつけて退却しましたこの爲め枕木や橋の臺等は粉みじんになつて散亂したかく物質上に於てはあまり大功はないけれど敵の總司令官の精神には云ふべからざる痛手を負はしたのであります。

挺進隊は普通の戦闘より苦しいものです何故かと申しますに、第一彼等の通過すべき蒙古の東方に關する地圖は全くなく其上敵狀は不明でまかり違へば捕虜になるも計り難いと云ふ有様だから始終不安の念にかられるのです。又十分の休養と云ふものは此の場合勿論出來ない且つ支那人や蒙古人から食物をもらふのであります皆粗末なものばかり、此の附近は非常に寒く零下三十度にもなることすらあります此様な困難危険を侵して其目的に向つて進むと云ふ事は實に／＼容易ではありません。此の隊が出發するに際して長沼隊長の下したる訓示の一節に曰く

此の任務は騎兵として頗る名譽あるものである従つて其責任の大なるは云ふを待たないこゝに於て枝隊は非常の危険と困難に堪ふる勇氣と体力とを要する、と

又秋山少將の訓示に曰く

挺進隊の前途は殆んど豫想し難く幾多の困難に會するならん今若し諸君にして不屈不撓の精神を有せざ

れば容易に此事業を遂行し得ざるべし、と

如何に困難であつたかを想見する事が出来ませう。

挺進隊の夜戦で死傷したものはどうしたかと申しますと戦死者は其處に墓を建て、捨て去つたのであります。嗚呼今迄困苦を共にした战友を捨て、歸る上下の心はどんなでありましたらう。輕傷者は支那馬車に乗せ重傷者は支那人を備つて擔架に乗せて連れて歸りました。

造家屯あたり等ではどうしたかと云ふと敵前千米邊り迄は衛生隊が擔架で野戦病院の繃帶所へつれて行きます。然しこれとても晝の間はともやれない夜間闇にまぎれてこつそりどやるのだ故に晝間は兵が各自携へて居る繃帶等で急座の手當をします。大隊附の軍醫看護卒等が居りますけれども、不充分であります。給糧は如何と云ふに背負袋にパンや生米を入れて持ち歩きます。然し水がないのに一番閉口するので水がなくなると人間の元氣は減つてしまひます。やつと晝頃に河の水が融けるのをしやくつて渴を凌ぐと云ふ有様。

次は最後として乃木大將が奉天戦前に第三軍に下された訓辭を讀みます（全文を讀まれたれど筆記する能はず單に其大意に止むるの止むを得ざるを遺憾とす諸子幸に許せ）

諸子はよく萬難を排して敵の稱して以て不落となせし旅順要塞を攻略せり諸子の忠勇は世人の均しく認め余の正に嘆賞する所なり今や戦局轉じ各團体は攻城戦を終へて野戦に移り一大活動に參與せんとす宜しく軍隊の士氣を鼓舞の攻撃精神を振起すべし野戦に於ける責任と任務とは諸子の熟知する所にして予の喋々を待たざる所也左に其大要を示して自ら諸子の實踐躬行を待たんとす

一、言を共同動作にかり責を隣隊に歸するは戦場の通弊なり宜しく自ら困苦を侵して他を救ひ決して他の助を待つこと勿るべし

二、勇猛邁進は野戦に於ける必勝の良法なりたとへこれがために一部の全滅あることも全班の勝利を得べし戦場に止るは非常なる損害を受くるを以てたとへ暴進の誹を受くることも勇猛邁進せよ

三、彈藥を節用せよ

四、敵の斥候の小部隊を射撃すべからず寧ろ小敵を逸して大敵を得ることに努力せよ

五、敵は優勢なる騎兵を有す故に軍の背後は不安なるを免れず然れども敢てそれに留意するなく進んで困苦缺乏に堪へよ

六、既往の經驗に徴するに我軍は全數に於て優勢なる敵に當り耐忍以て常に勝を制せり將來に於る我軍は又優勢の敵に遭遇することなきにあらず故に益々堅忍不拔の精神を養成し以て終局の勝を制せよ

第三軍司令官 乃 木 希 典

話はこれで終りますが申すまでもなく諸君は充分要點をおどりになつた事と思ひます、終始一貫忠君愛國堅忍不拔嚴正なる軍規等が勝利の基となつたのであります。本日は九年目の記念にあたりますが何時ま

たこの様な激しい戦争があるか知れませぬ其の點に於ては軍隊では充分に兵を練つて居ります又地方に於ては國民は大に國を富ますことをやつて居るのであります。實に富國強兵は之れ國家發展の基であります。

又國民皆兵主義の下にある諸君等は直接軍人を志望するとせざるとに關せず堅忍不拔熱心誠實規律等の美德を養成し各方面に發展して國家富強の基を開いて頂きたいのです。

希くば諸君今日の話を只戦争の勝敗ばかりと思はず各方面に此の話の精神を以て大に活動して頂きたい諸君は未だ春秋に富む實に諸君の前途は多望であるどうか充分しつかりと奮闘して下さい。

終に臨んで陸軍志望の人々に一言します。

將校になるのは身体の壯健が一番ではありませんが然し精神も確つかりして居る人でなければなりません又其上に將校は才幹のある人でなければなりません何故ならば戦の勝敗は兵數の多寡軍隊の精練士氣の巧拙地勢の如何時刻及び豫期せざる變事によつて定まるのでありますがこの士氣の巧拙と云ふ事は一に將校の肩にかかつて居るのであります故に最も俊秀なる諸君が志望せられんことを希望して止まないのであります。

どうも下手な講話で御退屈でしたしやう、のみならず口調が兵に對するやうな怒り口調が多くなこと
に失禮致しました。(終り) (文責在記者)

猛獸狩實驗談

三石白水氏演

私が之から御話しやうと思ひますのは明治四十年から海ではベーリング、アラスカ、コンマンシャー、オコック、陸では樺太、北海道、朝鮮を前後五ケ年間猛獸狩をやつてまゐりました其内四十三年の十二月から四十五年の六月まで九一年六ヶ月の間朝鮮の山の中に於て虎が二匹豹が二匹熊を十一頭狼二十八頭を斃したその實況を話したいと思ふケン共私は話が極下手で孰れかと云ふと私は口の人でなくて寧ろ筆の人であります私の冒險談を聞いて或は病氣になり或はそれが基となつて死んだ人は幾らもある又病篤く死に濱して居る者でも直ちに全快し落第に垂々として居るものも立地に及第する如是であるから文部省では私に醫學博士號を授けんと審議中ありますシカン乍ら以上は眞面目に云ふた嘘であります假令下手ではあるが確に諸君に満足を與へる事は出來やうと思ひます是から御話に移りますから暫くの間御靜聽を願ひます。

尤も一年六ヶ月の經驗談を話すのだから少くとも十五六時間は要るのであるが今與へられたる時間は僅かに二三時間である到底その概略も話すことは六ヶ敷いそこで一瞬一秒と雖も休まずに續けてやりますシカン乍ら水を盛んに飲みますから生理作用によつて下から排泄する事が必要でありますそれで途中區

切るかも知れません但し此の限りに非ず。

さて朝鮮の虎狩りと云へば加藤清正が片鎌の槍の歴史的事業をも聯想されますが私は尙々苦心慘憺を嘗めたのであります私が最初の動機は私が學校を卒業して父の居る北海道へ久し振りで歸つて八月二日と云ふに再び東京へ歸へらふと思つたが其頃は北海道でさへ暑いので東京の方は非常に暑いと云ふ事を聞いた之れは東京へ歸らずに寧ろ餘り暑くない北海道の北の方の北見の國に父の經營して居る牛や馬の牧場があるから茲で夏を送らふと云ふ考へを起して出掛けた八月五日に江刺についた夫れから四五日は何もなかつたが丁度八月の十日にウエシナイ河の河上約二里半のウエシナイ牧場に熊が出たと云ふ報知があつたので若い連中は残らず仕度して裸馬に乗つて出かけて仕舞つた自分も出掛けやうと思ふて押入れを明けて見るとアメリカのウエンスター會社製の自動六連發銃がある引金を開いて見ると弾が六つ込めてある夫れから直ぐに其鐵砲を擔いで父の愛馬の秋月に跨つて其牧場に駆け付けた所がそこら一面牧草が生へ茂り雨上りの事とて熊の足跡が判然と痕されて居た計つて見ると其中が七寸左右の足の距離が四尺前足と後足の間が一丈三尺餘りあるソコに居つたアイヌにコンナ大きな熊が居るかと思つて見るとへイ居りますヲリヲリ一丈三尺位の熊は出て來ますと云ふとである一丈三尺と云ふと内地の動物園邊りに居る象よりも大きい熊が折々出て來ると云ふに至つては驚かざるを得ない夫れから根岸松林と云ふ二人のアイヌと宜い獵師三人と自分と都合六人連で牧場から熊の足跡を辿つて山に入つて行くと笹や草が唯

兩側に靡いて居る丈で三日三晩追ふて行つたが分らぬ四日目に或る山の麓で右側と左側とに草が靡いてあつて譯が分らぬから之れはどつちに行つたのかとアイヌに問ふたサウすると「旦那之は一疋ぢやありませんぬ」と云ふから一疋の熊を六人で追ふよりは三人づゝ、二手に分れて行つたら如何ぢやと云ふ相談してそれぢや左様しやうと云ふとになつた私と根岸松林の三人は右手に橋本と云ふ牧夫と獵師の二人が左手に向ふことになつたが之が再び見るとの出來ない悲しむべき最後の別れと相成つたのである二日間は何處を通つたか分らぬ丁度三日目に或る山の麓に達してある木蔭に腰を下して握り飯を嚙ちつてゐると午後一時此の山の彼方にドンと一發音がしたと思ふとドンドンと二三發響き渡つたサア熊が居つたに違ひないかの砲聲は確に件の三士が發砲したるものならんと思ふて一目散に頂上に攀ち登つて見ると眞つ先の松林と根岸が「大變だ」と云ふから何うしたと云ふと橋本と云ふ牧夫が熊の爪に掛けられてゴロ／＼轉つて苦しんで居る「橋本しかつりしる熊にやられたか」と云ふと「私が最先に進んで行くど二間許りもあちうと思ふ見上ぐる様な大熊が目の前に立ち上つたからドンと一發放ちましたはその弾が中つたのやら中らぬのやら分らぬがガラ／＼と五六間許りも抛げられた様に思ふ」と云ふから「他の者は何處へ行つたのか」と尋ねると「それきり何も覺えませんが多分追つて行つたのでせう」と苦しみ乍らに答へる素よりそんな事があらうとは豫期して居らぬから綱帶も何も持つて居らなため仕方がないから禪を外してぐる／＼と結び付けて松林に里の方へ連れ歸らせた夫れから自分と根岸と二人が熊の後を追

ふこととした段々行く橋本のやられた場所から約四十間許の谷間に獵師が熊の爪に掛けられ、
に裂かれ、邊り一面血塗れになつて居た其の悲惨なる光景は復と見られぬ寒氣を生じたこの獵夫が一人か
と思ふとヒヨイと脇を見ると三間とも隔つて居らぬ所にモウ一人の獵師が矢つ張りやられて眼の球は飛
び出で口や鼻から一杯血を出して慘死を遂げて居つた。

熊の爪に掛つた二人の獵夫の死骸を一所に集めたが鼻と口から一杯血を出して居るその無慘なる有様は
逆も二目と見られぬ夫れで熊と云ふ奴は百間位先で人を見ると逃げるが五間若くば三間と云ふ所では突
つ立ち上つて約三四十秒位ヂットして居るが一發でも放つと飛び掛つて来るから其の時熊突刀と云ふ
もので刃を外側に附けた刃物を持つて手早く熊の腹に組付いて脇腹へ突き通すのだから熊は痛いのだからガワ
なら占めたものだ熊の前肢は上方へは自由に動かすが下方へは不可能だしかも熊は痛いのだからガワ
／＼やつて之を抜かんとして不自由な肢を以て斯ふ云ふ風に擲る（前に掻くが如き形容をなす）擲れば
擲る程体に刺る夫れは皮下注射どころの事では無い自分の腸まで通る夫れは電光石火の勢で素早くやら
ぬと行けぬ若し遅かつたらイキナリがばつと遣られて仕舞ふサウスする内に段々日は暮れて来る二つ
の死骸を前に置き俱にソコで一夜を明した頭の上は名も知れぬ鳥が鳴いて飛び歩き眠らうと思つても眠
られない腥き死骸を眺めては眠らうと思つても眠られるものでは無いツイまんじりとも眠ることが出来
なかつたから一晚眠らずに居つた漸くにして明けて見ると餘計もない只一人の同伴が「君よく考へて見

給へ我々と同じく連れ立つて來てあの岐路に於て右側を取つて來たものは皆揃ひも揃ろつて或は負傷し
或は斃されて仕舞つた況してかゝる術には最も長けて居ると思惟せらるゝアイヌ山獵師二人が二人まで
かゝる最期を遂げて居るを見れば如何に敵が頑丈であるか分る到底我等二人の匹敵する所でないそこ
で一旦里に歸て同志を集ひ大擧して征伐しようではないかと苦情を云ひだして仕方がない自分は頑とし
て聽かず「馬鹿云へ我同志不幸に際會せること既に是の如しである我等之が後を追ふもえ會はず之が爲
めに一發の彈丸をも浴せかくることをせず恬として背見えなんには只に男子たるの名折れるのみなら
ず彼等前人に對しても相濟まぬ次第ではないか。假令力遂に叶はず彼等が先轍を踏んで八ッ裂けになら
うとも一度この血腥き邊りに於て敵と見えて精力の程を試さねばならぬと叱りつけたものゝ心中竊かに
怖しくブル／＼振へて居たのである。

モ一松林が歸つて來さうな物だのに待つても／＼歸つて來ない北海道邊で能く人を食ひ馴れた熊は煙の
下には人が居ることを能く知つて居る然るに自分は今盛んに火を焚いて待ちわびて居たのだ熊は之を見
付けたのだらう此の時下の方からボキ／＼樹を踏んで來るものがある橋本のやられた方角であるその方
をヒヨイと向くと僅か五間斗り前に見上る様な熊が進んで來る之は何事ぞ心臓は丸で早鐘を打つ様で足
はガタ／＼振へて居る思切つて鐵砲を打つた多分當らずしてかすつたのだらう熊は大いに怒つて突ッ立
つたそこで無中で四五發放つた時熊はドツと斃れた傍に居つた根岸萬一の事があつたら突いて入らんと

熊突刀を手に持つて相構へて居たが「根岸如何だ」と云ふと「へい安心しました」と云ふて居る。「二人の力では迎も行かぬから歸つて呼んで来い」と話して居る所へ山の麓にガヤ／＼人聲がする段々近寄つて来るのを見ると松林が橋本を連れて歸つて私の父に其の事を話したものだから夫は大變だ若い人夫總勢十六人でやつて来た是等の者に云ひつけて皮と肉とを放して見ると百二十貫あつた皮の中が何れ丈けあるかと云ふと八疊の座敷へ敷いたのでは二尺宛餘る十疊敷の座敷一杯と云ふ大きな奴である始終内地の動物園の熊杯を見て居る方にソナナ事と云ふても容易に信せられぬかも知れぬが樺太からアラスカ方面の白熊と云ふものは四つに這つた身の丈が八尺から一丈位ある北海道のヒ熊で八疊敷から十疊敷位の皮の取れるのは餘りサウ珍らしくない。ソコデ親爺が熊狩杯に行くことはならぬと大いに小言を喰ひましたが私は此の爲めに人の命まで損じたから何うしても斷念することは出来ぬと言ふと父は貴様親の言ふことも聽かずに行くと言ふなら勝手にしろダガ自分一人で行け決して人を連れて行くことはならぬぞと散々に叱り飛ばされた。八月二十三日にシモモノウチを去つて北見のアチャルスノボリ（地名誤聞アルヤモシレズ）に九日目に到着した。

此時報知新聞社に熊狩の状況を出した所が同社から君今度は虎狩に行つて呉ぬかと云ふことである虎でも熊でも構はないヨシ行きませうと承諾したすると報知新聞で鐵砲を買つて呉れた之れは先年亞米利加の大統領のルーズベルトが亞弗利加へ猛獸狩に持て行た鐵砲で上には約八里見へる望遠鏡があり夫に照尺があつて其獸は何百メートルの所に居ると云ふことが分るから照尺に合せてドンと發射する彈は破裂式である千二百米突は利く發射すると火を吹き乍らグル／＼廻つて行て獸に適中ると爆發する最新式鐵砲である。

鐵砲の精銳素より必要であるが猛獸狩には分銅が尤も必要である分銅と申すことを承ると俗名は之を翠丸と稱するサウである何時の頃に改名をして何處の役場へ届けたか郡役所へ届けたものか宜く調べても見ぬが昔は確かに分銅と言ふたに違ひない其證據には今でも之を包むものをフンドーシと言ふて居る。

（笑聲起る）夫で昔の人は大事の任事をする場合には今度はお前フンドシをべて掛れと即ち分銅を確りべて掛つて假令ドンナ事に逢つても分銅が上つたり下つたりせぬやうにせよと言ふのである近頃世の中に膽玉杯と云ふ字が出来た、成る程私も膽のある場所は知つて居るが玉の所在地は果して何處にあらうか、物に驚くと魂消た杯と云ふ字を書くのを見るが物に驚いた所で魂は生きて居るのだから、之を真正に書くと丸上たと書かねばならぬ、突然虎や熊杯に出られて驚いて分銅が上る、三石お前強サウに言ふが初めて熊取りに行つた時熊に出られて驚いて心臓は早鐘を打つやうで足がガタ／＼震ふたと言つたでないかと言はれる方があらうがアノ時は橋本が怪我をして繃帯がない爲めに大事のフンドシを貸してやつてフリ分銅であつたからガタ／＼震いをしたのである、併し今は七尺長さの大フンドシをべて居るから虎でも熊でも何でもない。

十二月の二十七日に東京へ出て種々の準備を整へて出發して一月の五日の晩釜山から北朝鮮行の安平九と云ふ船に乗つた、丁度二晩一日掛つて七日に元山に着いた、元山に着いて北朝鮮の山々を遙かに見渡しました。

嗚呼攢棘すること春筍の蠹出するが如きアの山中に自分と引き組んで命の遣り取りをしやうとする虎が居るのだなと思ふた時は全身の血液が逆に流れ出した。

元山毎日新聞の西田常三郎と云ふ人等の出迎で大洞館と云ふ宿屋に着くと官民有志から私の爲めに御馳走會を開いて貰ふことになつた然るに夫から病氣に罹つて其月の二十五日迄元山の宿屋で寢て仕舞つた二十六日漸く出發して二十八日に永興の町に着いた所が又二十八日の晝から三十一日迄雪が降り積んだ此雪なれば虎の足跡が分るから虎狩には尤もよいと思つたから愈々虎狩の支度をして宿を出た。するとソコに二人の日本人が居る。其の二人が甲斐／＼しく仕度をして來て先生御早ふと云ふのである。見たことも無い二人の者が居るケレども折角聲を掛けるに黙つて居る譯にも行かぬ「ハイお早ふ」と云ふこと其人達が「先生は虎狩に行く」と云ふ事だから是非連れて行つて貰ひたい私共は江島と竹原と云ふ二人である」と云ふ事であるケレ共國に於て嘗て父から山へ這入るやうな時には一人りで行けと言はれた事もあり殊に今度虎狩等に行くには決して朝鮮人でも連れて行くことはならぬ若しその人が虎の爲めに命を取られるやうなことでもあつては氣の毒であるから山に這入るには一人で行けと嚴しく申付られて居る

次第であるから折角ではあるが御斷りをする」と云ひましたサウすると二人の者は夫ちや仕方がありませんぬ何うぞお先へお出下さい私等後から勝手について行くと言ふ是には弱つた、君等朝鮮では何を食つて居るかど聞いて見ると此北朝鮮では多く粟と稗とを喰つて居る山に這入ると馬の食ふ燕麥と云ふものを食ひお香々の代りに菜葉と大蒜の鹽漬で鹹くて臭くて逆も初めて來た人に喰へたものでないと云ふことだから米や罐詰を買ひ二人は人夫として更に朝鮮の言葉に通せる通譯を連れて出掛ることにした山に行くには山が精しくなくてはならぬ爲めに私は日本内地の道なれば下駄履で一日十六里草鞋なれば二十七八里から三十里歩くべき健脚を有し乍ら東下里まで僅々數里しか行けずして泊つた。朝鮮の家は一体に平家で一面に泥を塗るサウして半分仕切つて牛も馬も豚も相住居である何のことは無ひ台で空氣の流通杯は非常に悪い又泥を塗り附けるにも日本のやうに繩や藁を入れて塗るやうなことはしない泥許りで塗つて其上からゴテ／＼牛の糞を塗り附けて置くのだから其臭氣と云ふものは大變なものだ夫から其中に寢た所が蒲團杯と云ふものはない杯と言ふと四寸角位の木である其床下は水が通つて居て其下から盛んに火を焚いて家を温めるのだ之を稱して温突と言ふ夫からソコに寢た所が牛の糞の臭いやら特産物の南京蟲やら虱の一家一族親子兄弟が遠慮なく襲ひ來るので一睡もすることは出來ぬ然るに朝鮮人は何とも思つて居らぬ甚だ不思議だと思ふて聞いて見ると彼等はおギアと生れた以來湯と言ふものに入つたことが無い爲めに垢が一分位溜つて居るので南京蟲の齒位では逆も皮膚迄は届かぬと言ふたが成る程サ

ウかも知れぬ。

サウスする間に夜が明けた私は尾籠な話であるが朝起きると便所に行きたくなつて頻りに探しに探したが一向見當らない不圖一寸離れた所に黍殻で作つた一寸したものがあつたと思つて雪を踏み分けて行つて其中に這入つて見ると地面に深く甕を埋めて其上に蓋がしてあるその蓋を取つて見るとブンとそれらしい薫りがしたから其甕に跨つて尻を捲つて累々とやつて退けた二人の同行者に向つて朝鮮人は家は汚いが便所だけは奇麗だと言ふと朝鮮人に便所はないと言ふ答であるそれ程奇麗と云ふことは無いが黍殻で屋根を作つて家の不潔な割合には立派だサウスすると一人が見て来て顔の色を變へて便所ぢやありませんかアレは朝鮮人が一年中食ふ爲めに漬けて置いたおコウ／＼ですと云ふその御香々は菜葉と大蒜を漬けたのだと言ふから臭かつたのも道理であるサア夫は大變だ愚圖々々して居ると喰はされるかも知れぬから早く立たうと云ふので宿賃壹圓と外に損害の意志を以て五圓拂ふて早々茲を飛び出した。朝鮮に居る獸の種類を擧げて見ると先づ獐と云ふものが居る夫れで

虎 + 豹 = 彪

豹 + 彪 = 山猫

犬 + 狼 = 山犬

豚 + 野生 = 山豚

猫 + 野生 = 山猫

山猫と言ふのは三四尺位ある之が三石式動物學方定式と云ふのである（笑聲起る）而も其日に獐を一頭獲つた。

夫から今日自分は此山に右から登るから左から竹原君と川崎君とが登り若し虎が居つたら挾撃にして一擧に雌雄を決しやうと言ふことに決して稍々四五町程も行くも圖らず虎の足跡を見附けた。サウスすると川崎と云ふ男の分銅が甚だ穩かでない、モウ僕は行かぬ若し虎の爪に掛つたら夫で壽命がお仕舞だ僕が行かぬ是から戻り度と云ふ、戻りたかつたら戻り玉へと云ふて歸へし夫から谷に降り山に登り約一里半許り行つて見ると虎の足跡が無くなつた、朝鮮の獵師に聞いて見ると虎と云ふ奴は鼻で匂ひを嗅ぐことは出来ぬが其の代り非常に用心深い、丁度玩具の虎のように三方見廻して行くサウスである、夫から七八丁程行つてやう／＼右に岐れた足跡を見付けた夫から其の日は西上里と云ふ所に着き次の日には咸鏡南道の五峰山の中邊に至つた此の山は三方に岐れた山で行佛庵と云ふ寺がある此の村に行つて此邊に虎が出るかいと云ふと何でも分らぬことは行佛庵で聞くと云ふことになつて居る、夫で虎が出るかと聞くと行佛庵へ行くと云ふから行佛庵に往て何だえ虎が出るかへと坊主に聞くと此の裏の山で毎晩鳴きますと云ふ返答だ、本統かえと聞くと本統だと云ふソソなら一番十分晝寢をして置いて暮方から起きて今に虎が鳴かど待て居たが鳴かぬ夜になつても夜半になつても鳴かぬ、夫から坊主の寢間に行つて起きろ／＼

虎が鳴かぬぢやないかと言ふと何處か遊びに行つたのでせうと平氣なものであるには弱つた。昔から日本では嘘と坊主の頭はゆはぬと云ふが朝鮮の坊主は髪を結ふて居る夫が爲に矢ッ張り嘘も言ふと笑つたのである、朝鮮の坊主の頭は三角形に髪を結ふて居る夫から二月の八日に五峰山の向ふの高山に登つた翌日即ち二月九日の午後五峰山の絶頂と谿を隔つた三川山と云ふ山に登つた。

突然目の先一間程の所に一疋の猛虎が見はれた、咄嗟の間に一發引き金を引いたが我が身は何ふなつたか殆ど夢中の状態で約三分間程経つて宜ふ見ると虎の影も形も見えぬ、ビリ／＼足が震いて居る夫から三川山に新らしく虎が雪を蹴散らした足跡を追ふて登つて見ると血を滴した跡がある薩ッ張り分らぬ、ソコで萬池里まで二月の九日の晩出て十日の日はトウ／＼新らしい足跡が分らなくなり二月十一日永興の町迄引返した

谷垣と云ふ男が來て朝鮮人が君の事を笑つて居る何んと言て笑て居るか云ふと日本人杯に虎が捕れるものかと言つて居る、日本人は虎を打つのに文明の鐵砲を以て打たうと云ふやうな考を以て居るが夫れは絶対に空目だ火繩銃の大きい玉でないと言つて居ると聞いて腹が立つの立たぬの云て僕の瘡癩玉はグーッとコミ上げて來て破裂した、日本人に取れぬ生意氣千萬な縦シドンものか今度は只一人りで行くと其の晩に玉の用意をして東京を出る時にブリッドック、ジョンと云ふ犬が病氣で入院して居つたのが全快して送つて來たので二月の十三日に此のジョンを連れて三川山の麓に至ると

ジョンは此犬の鼻に如何なる匂がしたかクン／＼フツ／＼と頻りに雪を掘て居る之れは何でも虎の匂でもするのでないかと思ふたからジョンに向つてオイ／＼ジョン虎の匂がするなれば其居所迄連れて行けと言ふて頼んで居るのである。

其内に犬は雪の上を腹這ひをし始めた、這ふと云ふよりは泳ぐと云ふが適當かもしれぬ、夫から自分も一所に泳ぎ出した、三石茲に雪泳の術を發明した、夫から熊周山と云ふ山に登つたが飯は長い時間喰べず腹は減り切り而かも泊るべき宿もなく暫く雪の上にひツくり返つて寝てゐたが、朝の三時半頃になると段々体温が冷却して來て死ぬ外はなくなつたが三石は物も食はずに餓死したと言はれては死後の不名譽だ可愛サウだが愛犬のジョンの命を貰つて露の命を繼ぐの外はない、腸を斷つと思で鐵砲を取り上ぐる刹那麓を見るとソコに朝鮮の家がある、夫から漸く犬の命も取らずに濟んで朝鮮人の家に着いた、朝鮮人は汚いと云ふことを一寸も知らぬ、枕元に盆の深い様なものを置いてある何かと思ふて見ると家内中がこれに小便をして明る朝之れで家内中が顔を洗ふのである、決して之れは珍しい話ではない、從來の朝鮮の皇帝陛下今の李王殿下の洗面用の爲めに小便をする役目が出来て居て朝から晩まで水を呑んでは小便をし水を呑んでは小便をする人間の水道みたやうなものが出来て居る、朝鮮の婦人は小便で顔を洗ふとキメがよくになると言ふて十二三才以下の少年のしたのは童便と云ふて一升の價が參圓位して宮中邊では日本に於ける白粉の代りに顔に塗ることになつて居る。